

駄馬と百姓

小川未明

青空文庫

甲こうの百姓しやうは、一いぴきの馬うまを持もつていました。この馬うまは脊せが低ひくく、
 足あしが太ふとくて、まことに見みたところみにくうまは醜みにくい馬うまでありましたが、よく
 主人しゆじんのいうこときを聞きいて、その手助てだすけもやりますし、どんな重おも
 い荷物にもつをつけた車くるまでも引ひき、また、あるときは脊せの上うえに荷物にもつを積つ
 んで歩あるいたのであります。

他たの馬うまは、よく主人しゆじんの意いにさからつたというきことを聞きま
 けれど、この馬うまにかぎつて、けつして、そんなことあせはなく、汗あせを
 流ながしてよく働はたらきました。それがために、甲こうの百姓しやうは、どれだけ利り
 益えきを得えていたかわかりません。

「さあ、もうすこしだ。我慢がまんをして歩あるけよ。」と、主人しゆじんは疲つかれ

た馬うまに向かむつていいました。

馬うまは、うなだれて、黙だまつて重おもくるまひひを引ひいていました。また、あ

るときは、主人しゅじんは、

「さあ、もう一つ先さきの茶屋ちややまでいっいたら休やすませてやるぞ。そして、

おまえにも餌えを食たべさせてやる。」といいました。

馬うまは、その言葉ことばに力ちからを得えて、いっしょうけんめいで車くるまを引ひいて

ゆきました。そして、やがてその茶屋ちややに着つきますと、百姓しやうは、茶ち

屋やの中なかへ入はいつて休やすみました。自分じぶんは茶ちやを飲のんだり、お菓子かしを食たべ

たりしましたけれど、外そとに疲つかれて、汗あせを流ながして立たっている馬うまには

かまいませんでした。

百姓しやうは、自分じぶんの疲つかれがなおると、また馬うまの手綱たづなをとつて引ひいて

ゆきました。彼は、先刻馬に向かつて約束をしたことなど、すっかり忘れていたのです。

馬は、心の中で、どう思ったか知らないけれど、主人のいうがままにおとなしく働いていました。

「こんな醜い馬だけれど、こうして、よく働いているから、まあ飼っておくのだ。」と、甲の百姓は、自分にもそう思い、また、人に向かつて、そう語りました。

馬は、なんといわれても、下を向いて黙っていました。ある日のこと、甲は、その馬にたくさん荷物をつまみ、重い車を引かして町へゆきました。途中その馬を見た人々は、みんな驚いて、口々に、馬をかわいそうだといひ、また、よく働く、強い馬だ

といつてほめたのであります。

甲こうの百姓しやうは、荷にを下おろしてから、馬うまを引ひいて自分じぶんの村むらに帰かえつてきました。その途とちゆう中おつ、乙おつの百姓しやうに出であつたのです。

乙おつの百姓しやうは、じつに脊せの高たかいりつばな馬うまを引ひいていました。見たところでは、どこへ出だしても恥はずかしくない馬うまでありました。その馬うまのかたわらへ甲こうの馬うまが並ならびますと、それは較くらべものにならないほど、姿すがたの上うえで優ゆう劣れつがありました。甲こうの百姓しやうは、内ない心しん恥はずかしくてしかたがありませんでした。

そのとき、乙おつの百姓しやうは、つくづくと甲こうの馬うまをながめていました
が、

「おまえさんの馬うまは、なかなかいい馬うまですね。」といいました。

甲こうの百姓しやうは、内ない心しん恥はずかしく思おもつていたところですから、こ
ういわれましたので、顔かおの色いろが赤あかくなりました。

「いくら、おまえさんの馬うまがりっぱでも、そうばかにするもので
ありませんよ。」と、甲こうの百姓しやうはいいました。

すると、乙おつの百姓しやうおどろは驚おどろいて、

「いえ、私わたしは、けつしてそんな意味いみでいったのでありません。平ふ
常だんから、あなたうまの馬うまを感かん心しんしてしまいましたので、そうだったので
す。私わたしの馬うまが、なにいいことがありましたよ。まったく、私わたしの手て
には、もてあましていっているのです。あなたさえよろしければ、いつ
でも換かえてさしあげますよ。」といいました。

甲こうの百姓しやうは「いつでも換かえてやる。」と、乙おつの百姓しやうがいいまし

たので、はじめで、彼が、ほんとうに自分の馬をほめていることがわかつたのであります。そして、なに、よく働くも、働かないも、使い方ひとつだ、と甲の百姓は思いました。自分の馬がいいのでない、俺が、うまく馬をだまして使うからだ。もし俺にこの乙の上等の馬を持たしたなら、この馬より幾倍よく馴らすかしのれない。だいいちりつばな馬で、どこへ出しても恥ずかしくないだろうと考えました。

「それほど、おまえさんが私の馬が気に入ったのなら、いまでもいいから、換えてあげますよ。」と、甲の百姓はいいました。

こう聞くと、乙の百姓は、たいそう喜びました。

「それはありがとうございます。私は、いままで、どれほど、こ

の馬うまに悩なやまされたかしません。まことにいうことを聞きかない馬うまです。あなたはよく仕し込こんでください。」と、乙おつの百姓しやうはいつて、自分じぶんのりっぱな馬うまを甲こうに渡わたし、甲こうの持もつていた脊せの低ひくく醜みにくい馬うまを受け取うつて、いたわりながら、乙おつの百姓しやうはあちらへ去さつてしまひました。

甲こうの百姓しやうは、乙おつのりっぱな脊せの高たかい馬うまを連つれて、我わが家やへ歸かえりました。その明あくる日ひから、甲こうの百姓しやうは、その馬うまに車くるまを引ひかせて歩あるくことになりました。

すると、すこし荷にが重おもいと、馬うまは首くびをふつてすこしも動うごきませんでした。甲こうの百姓しやうは、これは太ふとい奴やつだと思おもつて、ピシピシと繩なわで馬うまの脊せ中なかをなぐりました。けれど、なぐればなぐるほど、馬うまは

いうことを聞きませんでした。

「なに、俺が手なずけたら、どうにでもなるだろう。」

と、甲の百姓の思つたことは、まったくあてがはずれてしまいました。

それにつけ、いままでの馬は、醜かつたけれど、まことにすな

おな、いい馬であつたということが、はじめてわかりました。

甲の百姓は、とうとう腹をたててしまいました。

そして、馬の手綱を無理に引つ張りました。

すると、あくまで剛情な馬は急に暴れ出して、甲の百姓を

そこに蹴倒して、手綱を切つて、往來を駆け出したのでした。

村じゆうは、大騒ぎをしました。

その馬うまを取りしとずめるやら、甲こうの百姓しやうを介抱かいほうするやら、たいへんでしたが、その後のちも甲こうの百姓しやうは、いつまでもその馬うまのために弱よわらせられました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「駄馬《だば》と百一姓《しょう》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

駄馬と百姓

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>